

第Ⅳ部門

祭礼行事に見る都市の歴史的空間

大阪工業大学工学部 正会員 ○土屋 正宏
 大阪工業大学工学部 竹中 智顕
 大阪工業大学工学部 正会員 吉川 眞
 大阪工業大学工学部 正会員 田中 一成

1. はじめに

江戸期の大阪は商人のまち、商いのまちとして繁栄していた。大阪には全国各地から物産が集められ、各川筋に軒をならべて建つ諸藩の蔵屋敷へは、舟が絶えず出入りして大変な賑わいであった。豊臣秀吉により築かれ始めた大阪城下は、江戸期に入って何度も開発を繰り返し、まちが活気に満ち溢れていた。社寺はその城下形成に重要な役割を果たしていたと考えられる。すなわち、城下の防衛機能や拡張を考慮して、社寺の配置が行われた。このように社寺は、都市の形成を支える重要な要素といえる。また、江戸期の社寺で行われた祭礼行事は最も華やかで、現在行われている祭礼での花火などといった演出も、江戸期から始まり現在に至るまで伝えられている。本研究では、社寺の持つ歴史的要素や江戸期以来の祭礼行事の変遷と現代に継承された社寺・祭礼の魅力を取り扱っている。

2. 目的と方法

本研究では、都市空間に広がりを持つ祭礼行事に着目し、都市変化によって、祭礼がどのように影響されたのかを把握する。祭礼行事がなぜ特定の場所で行われるのかなど、社寺に関わる空間が歴史的要素を持つことを示し、都市の変化に応じて祭礼行事がどのように変遷して伝統が守られてきたかを把握する。さらに、伝統文化といった歴史的な要素が数多く残る社寺の魅力を再発見し、都市空間への広がりを持つ祭礼を分析することで現代都市における歴史的空間の意味を考える。まず、社寺周辺が歴史的要素を持つ空間であることを統計変化と空間情報を用いて明らかにする。また、空間分析機能に優れた GIS を用いることにより、日常的には認識すること少ない神社の神域・氏子区域を GIS 上で定位し、祭礼行事の都市内での広がりや変化を視覚的に把握することを試みている。たとえば、歴史的空間を定義するために、社寺の現在位置をポイントデータとして定位するとともに、密度分布として視覚的に表現し、江戸期につくられた寺町と比較した。祭礼に関しては、DM (Digital Map) データを用いて祭礼が行われるルートを定位し、都市と祭礼の関わりを地形や地物から把握した。

3. 対象地の選定

対象地の選定には「日本名所風俗図会 10 大阪の巻」を用いた。これは、観光用の地誌である摂津名所図会を現代語訳して収録したもので、上下巻あるものは1つにまとめられている(表-1)。また、3巻の東成・西成郡は、大坂市街の町続きであることから郡名に関係なく記されている。全9巻のうち、祭礼行事が最も多く描かれているのが、大阪市にあたる地域である。そこで本研究では、現在の大阪市にあたる1～4巻の地域を対象地とした。また、都市と祭礼の関係を見るため、境外で行う祭礼行事である「大阪天満宮」の天神祭と「住吉大社」の住吉祭を取り上げることにした。変化の著しい都市空間に都市祭礼はどのように対応し変化してきたかを2つの祭礼行事から見出していく。

表-1 摂津国にある社寺・祭礼

巻	地域名	寺	神社	祭礼
1	住吉郡	23	11	8
2	東成郡	20	6	4
3	東成・西成郡	28	18	2
4	大坂部(上下巻)	25	14	9
5	島下郡・島上郡	30	34	0
6	豊島郡・川辺郡(上下巻)	47	20	1
7	武庫郡・菟原郡	26	16	0
8	矢部郡(上下巻)	28	13	0
9	有馬郡・能勢郡	40	18	0
	合計	267	150	24

 現在の大阪市

4. 天神祭船渡御ルートと比較

渡御ルートの比較は、元禄 16 年（1703）の地図を用いて江戸期の渡御ルートを定位し、DM データ上で江戸期と現在のルートをオーバーレイ表示させた。また、祭礼が氏地内で行われているか、GIS 上で渡御ルートに氏地も重ねて確認した（図-2）。江戸期の渡御ルートは氏子区域の南端である戎島まで渡御するルートであった。その後、地盤沈下の影響が大きくなり、船が橋桁の下をくぐることができず、昭和 28 年（1953）から氏子区域を大きく外れた現在のルートとなった。1000 年以上続く天神祭の中でもこのルート変更は最も大きい変化であった。

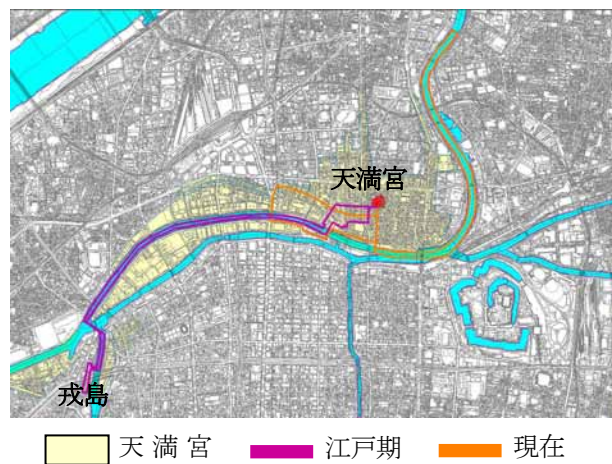


図-2 渡御ルート 江戸期と現在の比較

5. 天神祭陸渡御ルートに残る石碑

江戸期と現代の陸渡御ルートにも違いが見られる。現在の渡御ルートを調査したところ「樽屋橋」・「太平橋」の石碑が残されており、現在の陸渡御は石碑の残されている所を巡行していた。2つの橋は、天満堀川（昭和 47 年（1972）まで実在）に架かっていた。天満堀川は、慶長 3 年（1598）に下流半分が開削され、天保 9 年（1838）に上流へ掘り進められた。その後、堀川は埋め立てられ、現在では阪神高速が走っている。江戸期の陸渡御ルートに関しては難波橋上流の乗船場から堂島川を下り戎島の御旅所に向かうコースで、陸路はあまり通ることはなかったため、石碑などは残っていない（図-3）。

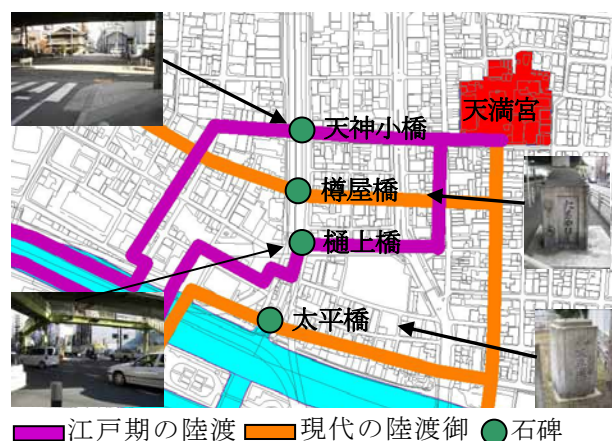


図-3 渡御ルートの比較

6. 住吉祭

住吉祭は、神輿洗神事から始まり、夏越祓神事、堺への神輿渡御祭と大規模な範囲で祭が行われる。図-4 では、過去の地形を考慮した地形データと DM データをオーバーレイし、江戸期の住吉大社周辺の地形を示すとともに住吉大社から紀州街道を通り堺市にある宿院頓宮までの神輿渡御祭のルートを示した。渡御ルート上には「霰松原」という名所があり、現在でもその地には顕彰碑が置かれ、海岸線が街道の近くまで来ていたことが把握できる。このようなことから江戸期に行われていた神輿渡御祭は、海を横目に巡行していたと考えられる。また、渡御の準備として行われる神輿洗神事も江戸期には鳥居前で行われていたが、現代では地形が変化したため 7 キロ離れた大阪南港で行われている。

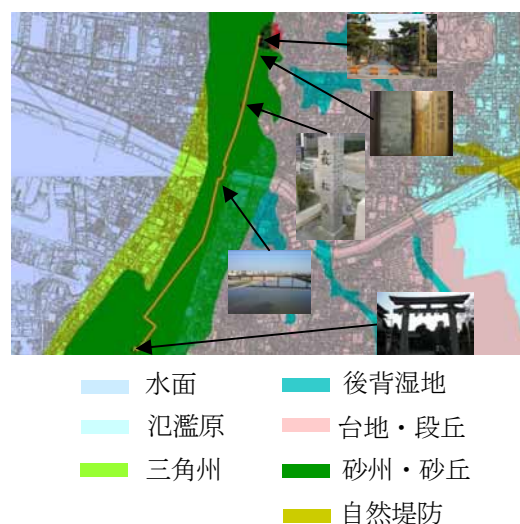


図-4 住吉祭・江戸期地形

7. おわりに

本研究では、社寺の統計情報と空間情報技術を用いて社寺が歴史的要素を持っていることを示した。また、都市祭礼である「天神祭」と「住吉祭」は地形・地物の変化に対応して、現在にまで伝えられている。時間とともに地形・地物は変化しているが、江戸期の風景を彷彿させるような石碑や顕彰碑が都市の中に残されていた。社寺や祭礼だけではなく、大阪のまちが歴史的要素を感じられるようになれば、大阪の魅力が一層増すと考える。

【参考文献】 森修: 日本名所風俗図会 10 大阪の巻, 角川書店, 昭和 55 年 6 月 30 日